

主題講演 わが内なる巡礼

「わたしは道であり、真理であり、命である」 ヨハネ十四章六節

西原由記子

イエスキリストは「私を信じる者は生きる」と言われました。

私はクリスチャンホームに育ち、小さい時から教会で多くのおじいちゃん、おばあちゃん、お姉さんに面倒を見てもらって大きくなり、東京神学大学に学び、さらに牧師である西原明と結婚し教会生活を致しました。キリスト教しか知らなかったのも、日本の有名なお寺とか神社へ行くと珍しく、教会にない飾り物や、礼拝様式に目を奪われました。実は私は伊勢神宮にも行ったことがありません。修学旅行で行くはずが戦争のおかげで中止され先生方だけが行かれて、お土産に伊勢神宮のお札の様なものをもらいましたが、「こりゃなんじゃあ」と捨ててしまいました。

日本に生まれながら、いわゆる日本の霊性に触れることなく育ち、その後、外国へ行く機会も多く、有名な教会に入って静かに瞑想し、祈りを捧げる時も多くありました。

いま改めて「わが内なる巡礼」とは？と自分に問い掛ける機会が与えられ、改めて霊的なことを考える機会を与えられて感謝しています。しかし、私にとって「霊なる場所」とは？と考えて見ましても正直分かりません。

私にとって神様は何時も共におられ、私を守り、支え導いて下さる存在です。神様は共に

歩んで下さるのですから、毎日が神様と一緒に、どこか遠くへ神様を求めて巡礼の旅をするのではなく、いま生きていること、すなわち人生を生きていることが巡礼と言っても過言ではないと思っています。私にとっての「内なる巡礼」とは？と普通に考えますと、静かに聖書を読み祈り、深く聖書の言葉を味わう時かも知れません。幸いなことに今は一人の生活ですから、十分な時間を与えられていますが、かと言ってそのことに十分な時間をとってはいないのです。

人間は自分がいつまで生きているのか分かりません。私は昨年旅先で入院してしまいました。何時死が訪れるかある意味で不安です。

マルチン・ルターが朝夕に祈りましたように何時死を迎えるか分からないので、「主よ、今日召されても感謝です。御心のままに生かして下さい」と何時死を迎えてもあわてないでいられるように、いまを生きています。それは自然に生きているということでもあります。一日二十四時間の中で、夜になると眠ります。それは疲れるからだけではないのです。夕日が西に沈むと夜が来ます。夜とゆう時は体を休めて、ゆっくり眠る時で、仕事はしないで体も心もゆったり眠ることが人間にとって大切です。仕事で休む時もなく、働かなければならない人もいます。しかし、どこかで時間を設けて体を休めないと体に変調をきたします。夜が来て休息を取るようと、周りが眠るように地球は動いてくれているのです。地球の上には、夜暗くならない地域もありますが、それぞれに工夫しています。出来るだ

け体を休めるように努力しています。

ルターは夜眠る時、神様の懷に眠るように全部を委ねて眠ること、すなわち死を思う大切な時であり、朝目覚めた時は、命を新しく頂いた復活の時、朝だと喜ぶ感謝の時として、祈りを捧げていたのです。

ところで私はスペインにあります巡礼の道を歩いてみたいと願ってはいますが、どうなりますでしょうか。

先にも述べましたが、盛岡で突然脳梗塞になり、初めて二週間入院した時から、何時でも死を迎えてもいいようにと、ある意味で毎日が巡礼の旅を続けています。

ところで、インディアンの死生観「今日は死ぬのにもってこいの日」(ナンシー・ウッド、フランク・ハウエル共著) この本を読みますと、ナンシー・ウッドはサンタフェエから二十マイル離れた荒野の外れに、孤独を友として住んでいると書かれています。しかも「孤独」は自分の霊的生活に欠くことの出来ない重要な要件だと言っています。これは私の生活とほど遠いことにびっくりしてしまいました。しかし、彼女がタオス・ベエプロの人たちの生き方に共感して詩の形で気持ちを表現していますので、その詩の魅力に心を動かされた私です。彼女の詩と共に旅をさせて頂いたこと、詩を読むことで「心の巡礼の旅」に同行させて頂いたことに感謝しています。

(にしはらゆきこ) 国際ビフレンダーズ東京自殺防止センター創設者